

---

# メダロット+

メダロッター R y u

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

メダロット+

### 【Nコード】

N5842Y

### 【作者名】

メダロット+RYU

### 【あらすじ】

メダロットより約三年・・・、

これは一人の少年とメダロットの出会いから始まり数々の仲間、ライバル、そして「トモダチ」との出会い、戦いを繰り広げる少年少女、メダロットたちの物語・・・。

そして未来の少年たちへつなぐ物語でもある・・・。

## Memory Disc 0 プロローグ(前書き)

初めまして、RYUです。

初めて書く小説ですが、それでも読んでくれると言う人は読んでください。

では始まります、メダロット+の世界をお楽しみください。

## Memory Disc 0 プロローグ

時は近未来……

世間では「メダロット」同士を戦わせる「ロボット」という遊びが大流行していた。

ある年、「魔の十日間」と呼ばれる事件が起きた。

しかしその事件は一人の少年とメダロットによって終演を迎えた……

それから約三年、一人の少年と一人のメダロットの出会いから新たな物語が始まる……

「……カ……ル」

「……うーん」

「ヒ……ル！」

「……」

「ヒカルってば！」

「……！」

僕は誰かに呼ばれ目を覚ました。

「・・・なんだ、キララか、おどかすなよ・・・。」

「おどかすなよ、じゃないわよ、小学校生活最後の夏休みが始まるって言うのに居眠りしてるなんて信じられないわ。」

起きた途端にここまで言われるとは・・・反論出来ないからしょうがないが。

「まあいいわ、・・・所でヒカル、あんたこのクラスの友達の事覚えたの？」

「・・・三年の頃から一緒の人達しか・・・。」

「あんた・・・。」

僕の言葉にキララは怒った表情を見せたが、すぐに呆れた表情で僕を見た。

「・・・じゃあ、せめてこのクラスで注目されている子ぐらい覚えておきなさい、いいわね、よく聞きなさい。」

キララがそう言ったので僕は話を聞くことにした。

「まず名前は「獅童 かい」、成績優秀で学年でもトップの学力ね、それで運動神経も抜群、これだけ聞けば完璧な人物だけど・・・。」

「致命的に口が悪い、のよね。」

キララが話していると、一人の女の子が話の間に入ってきた。

「イセキ！」

「で、なんであんだ達あいつの話をしているの？」

「ヒカルがこのクラスの人のこと全然知らないって言うから離した所なのよ。」

「ふうん、じゃあ続きはあたしが話すわ。」

するとイセキがキララに代わって話を初めた。

「さつきも言っただけだけどあいつは口が悪いからね、まともに話もできないから友達ができないの、目付きも悪いからみんな恐がって近寄らないしね・・・、話相手と言えばあたしぐらいなもんよ。」

「・・・へえ、わかったけど、なんでイセキがそんなこと知ってるんだ？」

「まあ、何て言うかあいつとは幼馴染みってやつだからね、大体のことは知ってるわね・・・。」

「そうなんだ・・・、でも珍しいなイセキから話しかけてくるなんて。」

「たまにはいいじゃないの。」

俺がそう言つとイセキは軽くながして話しを続けた。

「まあ、そう言う性格のせいで友達ができないから強がってさ、あれであいつさみしがり屋なのよね・・・。」

「おい。」

side - かい

イセキのやつが何か話してやがる・・・、ちっ、どうせまた有る」と無いこと吹き込んでやがるな・・・

「おい。」

「へっ?」

「てめえまた有ること無いこと吹き込んでやがったな・・・」

「そ、そんなわけないでしょ、あたしがあんたの事を面白おかしく話して何の特になるって言うの?」

「てめえは昔から事ある事にオレの事を変な風に他人に話してやがるだろうが!!」

「(あー、やっぱこいつめんどくさいわ・・・)」

「二人とも仲がいいわね。」

「「よくない!!!!」」

オレがキララとか言うやつに反論するとイセキのやつも同時に言葉を発した。

「真似すんな!」

「あんだこそ！」

「あっ、あのさー！」

オレたちが言い合いを始めるとヒカルってやつが話しかけてきた。  
一体何のつもりだ……？

「かいくんってどんなメダロットをもってるの？」

「……ああ？」

「……どんなメダロットもってるのかなーって。」

「……」

ちっ、めんどくせえ、オレはメダロットもってねえんだよな……。

7

「こいつメダロットもって無いのよ。」

するとイセキのやつがオレがメダロットをもっていないことを言った。……余計な事を言いやがって、くそっ！

「……メダロットなんてどこが面白いんだ……！」

そう言ってオレは自分の席に戻った……。

「オレ、なんか悪い事を聞いちゃったかな……。」

「ああ、気にしないでいいわ、すねただけだから。」



「うん・・・。」

(しょうがないわね・・・)

放課後・夜

かいの家

「メダロットか・・・」

(あいつ元気かな・・・)

・

・

・

・

「ごちだよ、」

「!」

『待って下さい どの、そんなに走ると危ないですよ!』

「わるいわるい、でもボクたまにしか とおじいちゃんのことにあそびにいけないからうれしくてさ。」

『大丈夫ですよ、時間はたっぷりありますから。』

「うん!」

「……いつの間にか寝ちまったのか、もう朝か……。」

「かい~~~~!」

すると下から母さんの声がした。

「イセキちゃんがきてるわよ~~~~!」

イセキが……?、あいつ夏休み初日から何のようだ……?

「か~~~~!はやくおりてこないとかあさんないちゃ~~~~!」

「今いくよ!」

母さんに泣かれるのは面倒だ、……しょうがない、行くっ。

オレは階段を下りて玄関に向かった。

「……何だよ。」

「さあ、出かけるわよー！」

「は？」

いきなり何言ってるんだ、こいつ。

「メダロット研究所に行くのよ、はやくしなさいー！」

「……なんでだよ、オレ別にメダロット興味ないし……。」

「今はそうかも知れないけど見学に行けば興味がわくかもしれないでしょ、それにこんな「可愛い女の子」からの誘いを断るって言うの？」

「そうよー、かあさんもそうおもってる。」

「……自分で可愛いって言ってる時点で可愛くねえよ。」

「なんか言ったかテメエ。」

「……いや何も言ってねえ。」

「そう、なら早く行きましょう。」

「……」

オレは半ば強引に研究所につれて行かれた。

メダロット研究所

「へえ、結構立派なんだな。」

メダロット研究所はオレが思っていたよりも立派だった。

「でも、入れるのか？」

「大丈夫よ、見学だけならタダだから。」

「そうか……」

そして俺たちは研究所の中に入った。

「まずは……展示されてるメダロットを見ましょう。」

「ああ……。」

オレは言われるがままにメダロットを見に行った。

「……」

俺が思っていたよりもメダロットの種類はすごかった。

「どっ、すごいでしょ、でもまだこれで全部じゃ無いのよ。」

「そうなのか!？」

「ええ、今のところ七十体以上もの機体が出てるわ。」

「へえ、七十体が、すげえな……。」

「しばらく見ていたら?、ちょっとある人に話つけてくるから。」

「ああ。」

そう言つとイセキはどこかへ行ってしまった。

言う通りしばらく眺めてるか……。

「DOG型シアンドッグ、こいつは射撃が得意なのか、CAT型マゼンタキャット、たしかイセキが持っていたやつか、DGU型ドンドグーか、変な顔だな……。」

いまいち興味をそられるメダロットは見当たらなかった。

「……うん?こいつは」

そんな時ふとオレの目にうつったのは……

「KWG型……ヘッドシザース……。」

オレの興味はそのメダロットに向いた、が、その時……。

「かい!」

「うわ!?!」

「博士に会いに行くわよ!」

「……いきなり声をかけんなよ、びっくりするだろうが……。」

「ボーっとしてるあんたが悪いんですよ。」

これ以上なんか言つと言い合いになりそうだが、黙ってた方が良さそう  
うだ。

「……。」

「……何黙ってんのよ、気持ち悪いわね、行くわよ。」

そしてオレたちは博士のところに向かった。

「博士、連れて来ました!」

「おお、イセキ君、彼が獅童かい君か。」

そこにいたのは白衣とサングラスのじいさんだった。

「あんたがメダロット博士……。」

「うむ、わしがアキハバラ アトム、メダロット博士じゃ。」

「……。」

「……ところでキミはメダロットに興味があるかね？」

博士は突然オレにそんな質問を投げかけてきた。

「……はい！」

「うむ、いい目じゃ、わしがメダロットについて教えてやるう、と言いたいところじゃが……生憎忙しくて、代わりに行っては何じゃがこれをやるう。」

博士から渡されたのは名札だった。

「これは……？」

「入ってすぐ横に扉があったじゃろ、そこにはわしの孫のナエがいるんじゃが、やつはわしの次にメダロットに詳しいと行っても良いじゃろう。」

「つまりこれがあれば部屋に？」

「うむ、それじゃあ楽しんで来るが良い。」

「ありがとうございます！」

オレとイセキは博士の孫のところへ向かった。

ウィーン……

「失礼します……。」

部屋に入ると長い黒髪の女の子がいた。

「あら・・・？」

「久しぶりね、ナエちゃん。」

「イセキさん・・・どうもお久しぶりです！」

どうやら二人は知り合いみたいだ。

「実はこいつあたしの幼馴染みなんだけどメダロットのことを教えてやって欲しいの。」

「はい、わかりました、えっと・・・」

「獅童かい、かいでいいよ・・・。」

「はい、よろしくお願いします。」

・・・可愛いな、イセキとは大違いだ。

ガッ！

「っ！？」

いきなりオレの足に激痛が走った。

「・・・なんかあんたいつもと態度違うくない？」

「このやる・・・」



「……………」

「……な、何？」

気が付くとナエちゃんが俺たちのことをじっと見つめていた。

「お二人とも、仲がよろしいんですね。」

「断じて良くない!!」

「ふふ、それではメダロットについてでしたね、始めますけどいいですか？」

「待つて、メダルとは何かってところから話してやって。」

「は、はい。」

そしてナエちゃんの説明が始まり、オレはしばらく真面目に聞いた。

「と言う事です、わかりましたか？」

「ああ、ちゃんと聞いていたから大丈夫だよ。」

「そうですね、よかったです……。」

「じゃ、そろそろ帰りましょうか。」

突然イセキがそう言った。

「もうそんな時間か？」

「もうお昼だし、帰った方がいいでしょ。」

「それもそうか・・・（また来ればいいしな・・・）。」

ドオオーーーーッ！！

「な、なんだ！？」

「博士のいた部屋の方からよ！」

「おじいさまの！？」

突然ナエちゃんが走り出したが、それをイセキが引き止めた。

「待ちなさい、一人じゃ危険よ、あたしも行くわ。」

「は、はい、わかりました！」

俺たちは一旦部屋から出た。

一体何が起きているんだ・・・？

しばらく走っているとオレたちはとんでもない光景を目にした・・・。

「メダロットたちが、研究所を破壊している！？」

「これは急いだ方が良さそうね・・・、かい！あなたは部屋に戻ってなさい。」

「な、なんだと・・・！」

イセキの突然の言葉にオレは頭にきてしまった。

「ふざけんな！なんでオレだけ逃げなきゃなんねんだ！？」

「あんだ、メダロット持ってないでしょ？」

「っ・・・！」

悔しかったがオレは何も言い返せなかった。  
紛れもない事実だからだ・・・。

「・・・」

ダッ！

「・・・ごめんね、かい。」

しかしその時オレは知るよしもなかった・・・、この後オレにとつて運命を変える出会い、いや再会があることを・・・。

M  
e  
m  
o  
r  
y  
D  
i  
s  
c  
1  
に  
続  
く  
.  
.  
.  
.

## Memory Disc 0 プロローグ（後書き）

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回から本格的に始まります。

興味を持って頂けた方はどうか  
かいたたちの事を見守ってやってく  
ださい！

ではまた！

（ノシ）

Memory Disc 1 新生コンピュータ誕生！かいとロクシヨウ（前書き）

今回はロボットがあります！

上手く書けてるかは解りませんがどうぞお楽しみ下さい！

オレはイセキに言われた通りに部屋に向かって走り出した……。  
くそっ！、オレにもメダロットさえあれば……。

オレの中でそんな感情が渦巻いた。

「……戻ってきたけれど……。」

もちろんやることなど何も無い、オレはここで指をくわえて見ている事しか出来ないのだ……。

『まだ、こんな所にも人間がいたか。』

「っ!？」

『安心しろ、苦しみは一瞬で済ませてやる。』

突然声がして振り向くとそこにはKTN・OX、ア・ブラーゲのパーツをつけたメダロットがいた。

あ、あいつまさかオレを殺そうとしてんのか……？  
い、いや大丈夫だ、メダロットは三原則がある、  
人間を傷つける事は……。

オレがそう思った瞬間だった。

ザシュッ！

「……っ！？、うわあ……！！！」

オレの腕には二本の切り傷が残っていた。

「まさか三原則があるから攻撃出来ないとも思ったのか？、生憎俺はそんなくだらしないモノからは解放されている……！」

や、ヤバい……、想像していたよりも相当ヤバい……、オレは死ぬのか……？、嫌だオレはまだ死にたくない……！！

「……われらの理想のために死ぬ。」

誰か、助けてくれ……！

ガキインツ！！

……あれ？、攻撃が止まった……？

オレが目を開くとそこには白いクワガタムシのメダロットがいた。

「ぬう……！？」

「……大丈夫でござるか？」

「……ああ。」

オレは突然の事に驚いて状況を把握できなかった。  
しかしこれだけはわかっていた。

こいつはオレの味方だと……。



「拙者が奴を倒す、おぬしはそれまで動かない方がいい。」

そう言うときいつはキツネ型に向かって言った。

「ふはははは、久しぶりに楽しめそうだ！」

「斬り捨て御免！」

キイーン！

二人の剣がぶつかりあい火花を散らす。

メダロツチが無いので正確にはわからないがまだ二人ともまだダメージは無いだろう。

「ふん見かけだけのクワガタでは無いようだな。」

「貴様こそ。」

二人の戦いはすごいものだった。

お互いに一步も引かない物凄い攻防だった。

「すげえ……。」

「ふ、クワガタムシ、オレの腕にばかり注意が向いてるんじゃないか？」

「なに？」

腕にばかり……？、あいつまさか！

「よける！ブレイク攻撃がくる！」

「……！」

「ミカツチー！」

ブウウン、ドオツ！

「はっ！」

ギリギリでクワガタはブレイクをかわした、よかった役に立てたみたいだ。

「……助かった、少年。」

「ああ……、ところで頼みがあるんだ。」

「なんでござるか？」

「一緒に戦わせてくれ。」

「……！、……解った共に戦おう。」

「ああ！」

オレはこのまま見ていただけなんて嫌だ、その気持ちがこの答えに導いた。

『指示は任せただござる。』

「おう！」

『ふん、人間が着いた位で調子に乗るな！！』

『いくぞ！』

そう言うとクワガタはキツネに向かって走りだした。

「チャバラソードで攻撃！」

『はあっ！』

キイイン！！

『むっ！？、・・・でえええいつ！！！！』

「かわしてピコペコハンマーだ！」

『ふっ！、はあああっ！！』

『ぬっ、ふんっ！！』

「かわされたか！」

『な、なんだこいつらは・・・、さっきよりも動きが数段良くなっている・・・！』

「・・・」

どう来る・・・？

『ぐっ、うおおー！！』

突っ込んできた・・・！

「・・・いいか、恐らくいまやつは冷静さを失っている、だからやつ突っ込んできた勢いを利用して・・・。」

『・・・解つたでござる！』

「・・・まだ、・・・まだだ、・・・、  
『いまだ！』」

ズバアッ！！

あいつは突っ込んできたキツネをチャバラソードで返り討ちにした。  
・・・！

『ぐっ、バカなっ・・・、この俺がこれ程のダメージを・・・！？』

『・・・』

「やった・・・！」

キツネは胸部に大きな傷がついていた、もう勝負はついたような物  
だろう。

『少年・・・。』

「ああ……。」

クワガタはオレに視線を向け何か同意を得るような顔をした。オレは何を言おうとしたのか大体わかったのでそのまま返事をした。

『拙者は争いは好まぬ、このまま引き上げるがいい。』

『ぐっ貴様ら名は……？』

『……ロクシヨウだ。』

「獅童かいだ……！」

『貴様は……？』

『狐王丸だ、ロクシヨウに獅童かい、覚えたぞ！、次に会う時はこ  
う上手くはいかんぞ覚悟しろ！』

そう言うと狐王丸と名乗ったメダロットは凄いスピードで去って行  
った。

「……はあ。」

長い緊張から解放されオレは安堵の溜め息をついた。

すると部屋に突然イセキたちが入ってきた。

「かい！」

「うおっ！……？」

イセキがいきなりオレの肩をつかみ安否を確認してきた。

「大丈夫！？、さっきあなたの叫び声が聞こえて、ケガとかは！？」

「大丈夫だよ……。」

「って、どこが大丈夫なのよ！、腕ケガしてるじゃない！」

「だからこれくらい大丈夫だって……。」

「そんなわけないでしょ！、早く手当てしないと！」

「帰って自分でするからいいって、少し切られた位だし……。」

「なによ！、あんたあたしがどれだけ心配したと思ってるの！？」

「まあそれくらいにしてやりなさい、特に大きなケガでは無いのじやから。」

しばらくして博士が入って来てイセキを宥めた。

……助かったよ博士。

「どうやら間に合ったようじゃな、ロクシヨウ。」

「えっ！？」

オレは博士が突然そう言った事に驚いた。  
博士とロクシヨウは知り合いだったのだ。

『ええ、言われた通り彼を助ける事は出来ました、ですが……』

「ケガをさせてしまった事か・・・、かい君、君はどう思っておる？」

「え・・・、オレはむしろ感謝しているよ、ロクシヨウが来てくれなかったら死んでたかもしれないし・・・。」

「だそうじゃ、彼は気にしておらん、それどころか感謝しておるんじゃ、そう自分を責めるでない。」

「・・・わかりました。」

ロクシヨウがそう言うと、博士がオレに話しかけて来た。

「実はのかい君、ロクシヨウは三年前にある事件を解決するのに手を貸したのじゃが・・・、その事件が原因でメダロットは登録制となり、多くの野良メダロットたちが居場所を失った、無論ロクシヨウも例外ではなかった、彼はほんの数カ月で多くの物を失ったんじゃよ・・・。」

「そうだったのか・・・。」

『・・・博士拙者はそろそろ。』

「うむ・・・。」

「待てよー！」

『！・・・』

気が付くとオレはロクシヨウを呼び止めていた。

「なあロクシヨウ、おまえ行くあてはあんのかよ？」

『とくには…………』

「じゃあオレのところに行いよ。」

『!?!?』

オレの突然の言葉にロクシヨウは驚いた表情を見せた。

「(ほう…………この少年、ロクシヨウを誘うとは思いつた事をするわい。)」

『…………すまないがそれは出来ない。』

「どうしてだよ？」

『拙者にはやらねばならぬ事がある。』

ロクシヨウがそう言う博士が話に入ってきてロクシヨウにこう言った。

「まあ良いではないのかロクシヨウ、しばらくは休んでも、おぬしは良くやっとなる、休暇をもらったと思つての。」

『…………解りました。』

そう言うとロクシヨウはオレの方を向き手を差し出しこう言った。



『これから宜しく頼むかいどの。』

「……………！、ああー！」

こうしてオレとロクシヨウ、新たなコンビが誕生したのであった。

?????side

『只今戻りました。』

「……………」

『報告、メダロット研究所の襲撃失敗に終わりました……………。』

「そう……………」

『申し訳有りません。』

「君ほどの実力があいながら失敗するなんて何があっただんない？」

『実はある人間とメダロットに邪魔をされまして……………。』

「……へえ、君をそこまで追いこむほどのメダロットなのか。」

『いえ、それが……。』

「……?」

『そのメダロット、人間の指示を受けてから動きが突然良くなりまして。』

「……へえ、それでその二人の名前は?」

『えっ?』

「ちょっと興味が沸いたんだ、教えてよ。」

『は、はい、人間は獅童かい、メダロットはロクシヨウです。』

「ふふ、かにロクシヨウか……。狐王丸、もう下がっていいよ。」

『はっ!』

「それと、襲撃の軒だけど僕は怒っていないよ、襲撃の目的は僕たちの力を見せつける為だからね、それに僕はできる限りメダロットも人間も傷つけたくないからね……。」

『はっ!、有り難きお言葉!』

「これからもメダロットと人間の真の理想郷をつくるため、宜しく

頼むよ。」

『はっ！、それでは失礼します！』

ふふっ、かにロクシヨウか・・・、面白そうだね・・・。

Memory Disc 2へ続く・・・

Memory Disc 1 新生コンピュータ誕生！かいとロクシヨウ（後書き）

お楽しみ頂けましたか？

誤字、脱字、その他指摘があれば言って下さい！

次回からしばらく平和です。フツーにメダロットという感じですよ。  
では。

（ノシ）

**M e m o r y D i s c 2 強敵登場！その名は竜崎！（前書き）**

今回はメダロットRでお馴染みのあのキャラも出てきます！

それではお楽しみください！

Memory Disc 2 強敵登場！その名は竜崎！

「……………と言つ訳で、今日から家で住むことになったんだけど。」

『よ、宜しく頼む』

……………やっぱダメか？

「おお…………、かい、お前もついにメダロットを始める気になったか！」

父さんは問題無いけど……………。

「……………そう、よろしくね、ロクシヨウちゃん。」

「じ、じゃあ、オレたちは出かけるから。」

「まで、かい！」

「な、なに？」

「彼のパーツだけじゃ組み換えができないだろ？これを持っていきなさい。」

そう言つて父さんは五千円をオレに渡した。

「あ、ありがとう、じゃ。」

そしてオレは急ぐように家を出た。

「やはり男の子はこうでなくちゃな。」

「……ええ。」

## 公園

『どうしたのでいじるか、かいどの。』

「うん、いや……。」

『もしかして母上どのはメダロットのことが嫌いなのか？』

「いや、そうじゃないんだ、ただ母さんはメダロットの話を全然しないからさ……。」

『そうでいじるか……。』

「……なあ、コンビニにしようぜ。」

『う、うむ。』

オレたちは話題をかえ、コンビニへと向かった。

## コンビニ

「来たのはいいけど……。」

特に欲しいパーツとかないんだよな……。

「まあ、見るだけ見てみるか……。」

オレはしばらく棚に置いてあるパーツをながめていた。

「……なあロクシヨウ、これなんかどうだ？」

『……メガフロント？』

なぜかロクシヨウの目が冷たくなった気がした。

「……どう思う？」

『なんとなくそれは嫌なのでござるが……。』

「別に全部つけなくてもいいんだぜ？」

『……左腕意外取り換えられそうでござる。』

「……わかった、そんなに嫌ならやめとくよ。」

……ロクシヨウはメガフロントに嫌な思い出でもあるんだろうか？

特に買う物も無いのでオレたちはコンビニを出ることにした。



すると聞き覚えのある声がした。

「かいー！ー！！」

「何だよイセキ、そんなに慌てて？」

「あんた研究所を襲ったメダロット達を追い返したでしょ、その噂を聞きつけたあるメダロッターに目をつけられたの！」

「・・・それでそのメダロッターってのは？」

「竜崎 蓮次、通称恐竜使いの「REX」よ。」

「れ、REX・・・・・・で、誰だ？」

オレがそう言うといセキはずっこけた。

「・・・あんた本当になんも知らないのね。」

「・・・」

「竜崎はこの辺じゃ名の知れたメダロッターよ！」

「・・・あ、ああ。」

「それでもって竜崎のやつは三日後に対戦したいって言っていたわ。」

「三日後か、そうと決まれば特訓だな、行くぜ、ロクシヨウ！」

『うむ。』

「待つんだ、君たち！」

すると突然誰かから声をかけられた。

「君たち竜崎と戦うのだろうか？、だったら僕に特訓をつけさせてくれないかい？」

「・・・誰だあんた。」

「すまない、名乗るのが先だったね、僕は大村 鱒次九郎、ジックと呼んでくれ。」

「・・・で、何でそのジックさんがオレ達に特訓をつけてくれるんだ。」

「竜崎とは少しね・・・、それに今の君たちでは竜崎には勝てない、それだけじゃダメかい？」

「・・・竜崎はそんなに強いのか？」

「ああ、少なくとも今の君たちでは敵わないだろうね。」

「・・・あなたに特訓をつけてもらえば勝てるってのか？」

「僕は力を与えるだけさ、勝てるかどうかは君たち次第だよ。」

「おもしれえ、だったらうけてやるぜ、あんたの特訓を！」

「そつでなくつちゃ面白くない、早速始めよう!」

「おう!」

「えっ、ちょ、ちよつと待ちなさいよ!」

こうしてオレとジックさんの特訓が始まった。

ジックさんの特訓はとても厳しいものだった、だけどオレたちは諦めずに最後までやりとげたんだ!

三日後

商店街

「・・・逃げずにやってきたみたいだな!」

「・・・イセキ、竜崎って高校生だったのか?」

「言ってなかったっけ。」

「聞いてねえよ!」

「別にロボトルの強さに年齢が関係する訳じゃないんだからいいじ

「やない！」

「おい、お喋りはそこまでにして、さっさと始めてくれないか？」  
しばらくオレたちが話していると竜崎にそう言われた。

「お、おうー！」

「この勝負、合意と見て宜しいですね？」

「おお！何だこのオッサン！」

「ロボットル協会公認レフェリーのMr.うるちだ、お前そんなこと  
も知らんのか？」

「わ、悪いかよ？」

「別に構わんさ、俺が興味あるのはお前の実力だ。」

「・・・始めてくれ、うるちさん！」

「それでは、ロボットルうー、ファイトおーー！！！」

やつが出してきたメダロットは恐竜のようなメダロットだった。

「いけ、アタックティラノ！」

『グオオオツー！！』

アタックティラノはいきなりハンマーを降り下ろしてきた！

『くっ!』

ロクシヨウも何とか避けることはできたが……あのハンマー凄  
い威力だ。

『グオアアアア!』

ブウンッ!

ブウンッ!

『くっ、当たったらひとたまりもないな……。』

「ふん、ちょこまかと、ティラノ!、ブレスファイヤーだ!」

『グオッ!』

ブオオッ!

『ぐあっ!』

「頭部に16ダメージ」

ティラノの頭部から吹き出した炎にロクシヨウが直撃してしまった。  
。。。

「大丈夫か、ロクシヨウ!」

『ああ、心配は要らぬ!』

少し見くびっていたかも知れないな……ジックさんに聞いてい

たよりもずつと強い……。

「ふっ、少しは抵抗してくれよ、それともその武器は見せかけか？」

「くっ、オレたちを甘く見るなよ！、ロクシヨウ、チャンバラソードだ！」

『でえええい！！』

「迎え撃てテイラノ！」

『グオツ！』

闇雲に突っ込んだって返り討ちにあっただけ、それぐらいわかっていたさ！

「ロクシヨウ、跳べ！」

『承知！』

「なに！？」

高く飛び上がるロクシヨウ、突然のことにテイラノも反応できなかったようだ。

『くられえ！』

ズバッ！

『グウ……！？』

「右腕に20のダメージ」

「よし、ロクシヨウ、畳み掛ける！、ピコペコハンマー！」

『うおおおー！』

「くっ、調子に乗るなよ、ガキが！ストライクヒット！」

『グオアアアアー！』

ズドオオン！

『！？』

「ロクシヨウ！？」

「左腕に40のダメージ、左腕パーツ、破損、脚部に10のダメージ」

「ふ、バカが、むやみやたらにがむしゃらの行動を使うからだ！」

「くっ、しまった・・・、うかつだった・・・！」

そくだ、がむしゃらの行動を行った後は大きく体制を崩してしまう・・・。

完全にオレが勝負を急いだせいで。

『大丈夫だかいどの、拙者にはまだ自慢のチャンバラソードが残っている！』

そんなオレをロクシヨウは励ましてくれた。

・・・そくだよな、後悔するよりも勝つための作戦を考えなければ。

「ありがとう、ロクシヨウ、・・・オレに考えがあるんだ、乗ってくれるか？」

『無論！』

「今残っているパーツから導き出せる答えはこれしかない、アンテナで命中精度を上げて頭を一撃で破壊する・・・！」

『・・・承知した！』

辛うじて脚部は破壊されなかった、これなら攻撃をかわしつつ索敵行動を行える！

「ロクシヨウ、アンテナ！」

『おう！』

ブウン ブウン・・・

「・・・何を狙っている、・・・やれティラノ！ストライクヒットだ！」

『グオオオオ！』

ブオンツ！

『ふん！』

ブオンツ！



『はっ!』

「ちっ、ちょこまか逃げ回りやがって!」

『グオオオオオツ!』

ブオンツ!

「いまだ! チャンバラソードだ!」

『うおおお!』

「な、何!」

ズバアツ!!

ロクシヨウの攻撃はティラノに命中した、だが……。

「脚部に55のダメージ、脚部パーツ、破損」

「ふっ、どうやら狙いがずれたようだな!、とどめだティラノ!!」

『まだまだ、拙者たちの攻撃はまだ終わっていない!』

「何!??」

『うおおおおお!』

ズバアアアツ!!

『グオアアアアツ!?!』

「頭部に50ダメージ、頭部パーツ、破損、アタックティラノ機能停止」

「ばっ、バカな!?!」

「リーダー機、機能停止!、そこまで!、勝者、獅童かい!」

「よっしやー!?!」

『ぶっ……!?!』

こうしてオレたちは初のロボットに勝利した。

「終わったようだな。」

するとジツクさんがやってきた。

「ジツク……!?!」

「気は済んだか、竜崎。」

「えっ!?!」

オレにはよく状況がよく理解できてなかった。

「二人とも知り合い……?」

「ああ、竜崎は僕の友人さ。」

「ええっ！？、じゃ、じゃあどうしてオレに特訓を！？」

「竜崎が君の噂を聞いてね、戦ってみたいなんて言い出すから……」

「余計なことを……。」

「でも、こうでもしなきゃ彼はお前に勝つことはできなかった、それともお前は弱い者いじめがしたかったのか？」

「……わかったよ、俺が悪かった。」

「これに懲りたら見境なく他人にロボトルをふっかけるのはやめてくれよ。」

「……ああ、そうするよ。」

すると竜崎……さんがオレの方に向き直って話かけてきた。

「かい、お前の実力は想像していたよりも高かった、正直驚いたよ、……それにしても気になることがある。」

「研究所襲撃の事ですか？」

オレは竜崎さんが気になることがあると言ったのでそう聞いた。

「ああ、一体誰が何の目的でやったのか……、メダロットたちだけの犯行なのか、それとも裏で誰かが糸をひいているのか……。」

「確かに気になるな……、一応僕の方から博士に調査してもらうように伝えておこう。」

「ジックさんは博士と知り合いなんですか？」

「ああ、博士には色々とお世話になっているよ。」

「はあ……。」

「今日はもう帰った方がいいんじゃないかい？、ロクシヨウのメンテナンスもした方がいいだろうし。」

「あ、じゃあそうします。」

「……何かあたし会話に入っていけてない気がするんだけど。」

「気にすんなよ、早く帰ろうぜ。」

「こづして色々あったけど今日は無事に過ぎて行った……………」

Memory Disc3に続く……………」

Memory Disc 2 強敵登場！その名は竜崎！（後書き）

今回は二人ともメダロッチをつけていたのでゲームに近づけて見ました。

戦闘描写など上手く書けているかわりませんが、もっとこうした方がいいなど意見があれば言ってください。

では。

（ノシ）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5842y/>

---

メダロット+

2011年11月20日20時08分発行